徳田球一全集

第五巻

五月書房

徳田球一全集　第五巻　定価三八〇〇円

発行日　昭和六十一年二月十八日
著　者　徳田球一
発行者　鶴田實
発行所　株式会社　五月書房
東京都千代田区猿楽町二丁目六番五号
郵便番号　一〇一
電　話　〇三（二三三）四一六一番
振　替　東京九―三三九四三

モリモト印刷・小泉製本

ISBN 4-7727-0028-5

目次

わが生い立ちの記……九
わが思い出……七七
まえがき……七九
一　ゴビの砂漠をゆく……八一
帰国への歓喜……八一
トロイカの旅……八八
山岳の怒濤……九五
ラマの支配……一〇四
社会民主主義者の分れ目……一〇八
もぐらの家……一一三
放馬の群……一一五
ノロへの襲撃……一一七
白砂の海……一一九
岩原の夜の宿……一二〇
国境の家……一二三
内蒙古の街道筋……一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

張家口の印象……一二九
蒙古をおもう……一三五
二　動乱の中国にて……一三八
革命の動力上海（一）……一三八
革命の動力上海（二）……一四六
温い同志の家……一五六
同志メーリングの思い出……一五八
南京への旅……一六〇
中国大陸の印象……一六四
最初の中国動乱の経験……一六七
山海関の印象……一七四
長春の日本家屋……一七七
北満の首都ハルピン……一八〇
満州里への旅……一九〇
張作霖弾圧下の華北（一）……一九一
張作霖弾圧下の華北（二）……一九八
恐怖者の心理……二〇六

再び上海をみる……二一九
日本帝国主義下の大連……二三二
五・三〇事件の前夜（一）……二三八
五・三〇事件の前夜（二）……二三六
五・三〇事件……二四六
陳独秀の思い出……二四七
張宗昌支配下の青島（一）……二五〇
張宗昌支配下の青島（二）……二五六
国民軍の上海占領前後……二六三
呂運亨の思い出……二七〇
蔣介石反革命後の上海……二七三
李立三の印象……二七八

獄中十八年

まえがき……二八三
小さな正義派……二八五
親孝行でとおる……二八七
……二八九

小学校で最初のストライキ……二九一
七高生から代用教員……二九三
郡役所書記……二九五
ふたたび東京へ……二九六
米騒動に参加……二九七
司法官試補の二カ月……二九九
弁護士時代……三〇〇
日本共産党を組織……三〇二
労働戦線統一と第二回党大会……三〇五
早大の反軍教闘争……三〇七
少年シンパ……三〇八
市ケ谷でむかえた大震災……三一〇
勉強室としての監獄……三一五
長老連の解党論と党の強化……三一六
三・一五に捕わる……三二〇
佐野学らの裏切り……三二四
公判闘争……三二七

網走――氷のこんぺいとう……三三四
監獄領地の農業……三三七
監獄の花……三四〇
お針と糸つむぎ……三四一
侵略戦争反対のたたかい……三四二
しいたげられているものがもっともよく理解する……三四五
親切な囚人たち……三四八
獄死した同志のことども……三五〇
獄中の読書……三五四
お天気てんぐになるまで……三五七
千葉、小菅、豊多摩、府中……三五九
終戦の前後……三六一
むすび……三六三
徳球大いに語る……三六五
私の結婚……三八四

わたしたちの読書 …… 三八六

資料

徳田書記長の死去について（日本共産党第六回全国協議会） …… 三九六

徳田書記長の死去に対しソ同盟中央委員会からの弔電 …… 三九七

故徳田同志の死去にかんする臨床報告 …… 三九八

故徳田球一同志追悼会における劉少奇同志の弔辞 …… 四〇〇

徳田球一を偲んで（モスクワ放送） …… 四〇四

解説　徳田球一の成長期と思想の形成　椎野悦朗 …… 四〇八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わが生いたちの記

金城医師の書斎　わたくしは中学三年生、一五歳のとき中江兆民の『一年有半』を読んだ。そのころわたしは沖縄県那覇の叔父の家にすみこみ、坂の多い一里ばかりの石ころ道を首里の県立中学へかよっていた。同じ家のおもやのおもてがわを借りて、金城清松という内科の医者が開業していた。大阪で修業し呼吸器が専門だったが、よくはやった。三二、三歳でまだ独身だった金城医師は経済、歴史、文学などの本をたくさんもち、おもやの二階が彼の書斎になっていた。

金城医師はわたしが祖母や叔父からひどいしうちをうけるのをみて同情し、月々五〇銭の小使いをくれたり、あるときはわたしのみなりがあまりぼろぼろすぎるといって、洋服と靴のお古をくれたこともあった。しかしわたしが一番うれしかったのは、彼がおもやの二階の彼の書斎にわたしを自由に出入りさせてくれたことである。わたしはそこへ好きなとき行って、どんな本でも手あたりしだいに読むことができた。

わたしは歴史が好きだった。その書斎でもまずはじめに歴史の本をあさって片っぱしから読んだ。箕作元八博士の西洋史の講義録が分冊であったが、その中のナポレオンやフランス革命のところなど夢中になって読みふけったものである。成瀬秀雄（元東大教授）の千ページもある『ヨーロッパ全史』も全部そこで読みとおした。トルストイの小説はわたしの中学時代に大きな影響をあたえているが、それも多くはその書斎で読んだのである。またその書斎には通俗医学書がたくさんあった。だれも知らない間にそれもいつかみんな読んでしまった。さらにそこには『大阪朝日』と『大阪毎日』がきていた。『朝日』は当時かなり進歩的な新聞だった。わたしはこれらの内地

の新聞を読んで、ふつうより年のわりに早く政治、経済、社会の問題に関心をひかれるようになったのである。

そのころのある日わたしは金城医師の本箱から、大きな活字のつかってある一冊のうすい本をみつけだした。表紙に『一年有半』と書いてあった。仮とじでいまでいえばパンフレットのようなものである。三ページと読まないうちに、わたしはその本にいままで読んだどんな本にも全くなかったあるものを感じ、それにひきつけられて、そのままおわりまで息もつかずに読みきってしまったのをおぼえている。

『一年有半』からわたしは強い感銘をうけた。

それは中江兆民の革命的な熱情と、権力にたいするたたかいの精神であった。わたしはこの本ではじめて革命家の情熱にふれ、また権力にたいする闘争を知ったのである。

『一年有半』を読んだころ　『一年有半』は明治政府の官僚、軍閥をやりだまにあげ、その専制主義と、人物の愚劣さと、政治の腐敗、堕落などをはげしく攻撃していた。たとえば伊藤博文をちょこ才で小りこうな事務官吏に毛のはえたような奴だ、とやっつけ、こういうのは一種の高等ほうかんにすぎないから政治の何たるかを理解できようはずがない、とののしっていた。山県も松方も同じような調子で鋭く批判されていた。『一年有半』というのは、兆民がカリエスかなんかにかかり、もう一年半はもたないと医者から宣告された病床で筆をとったところからきている。しかし一年半がすぎても兆民は死ななかった。そこで彼は筆をついで『続一年有半』を書き、それを

書きおえてからもなおしばらくの間生きていた。兆民は死ぬまでそのくらい気性の勝った男であった。

中江兆民の高い響きをもった言葉は、それから四〇年たったいまでもわたしの胸の底にりんとした余韻をのこしている。それはひとつには、『一年有半』を読んだのが、一五歳の少年期のものに感じやすい変わりめのときであったからかもしれない。

家が貧乏で一二歳で父に死なれたわたしは、中学へ行くためにどうしても叔父の家の世話にならなければならなかった。母方の祖母がこの家の実権者で、祖母は高利貸や泥藍（どろあい）のブローカーをやって金をためこんでいた。わたしは食わしてもらい、学校へやってもらうかわりに、かなりひろい家の朝晩の掃除とランプのほやみがきなどをしなければならなかった。それから無筆の祖母にかわって、高利貸と泥藍のブローカーの書記をつとめなければならなかった。祖母は無尽や「カラス金」で貧乏人からこまかい金をかきあつめた。「カラス金」というのは朝かして晩とる、の意で、この短い一回転に一分の高利をふんだくった。また水分の多い泥藍の目減りを利用し、沖縄の農民からそれを買いとるときと、鹿児島の商人へそれを売りつけるときと、二重の中間搾取をやった。農民には、目減りするからといって実際の斤目より二割くらいひいた代金をはらい、商人からは、目減りしたからといって実際の斤目より一割くらいふやした金額をうけとるのである。このごまかしを計算し、帳づけをするのが書記であるわたしの仕事であったから、資本主義的な金もうけのカラクリが一三、四のころからわたしの頭にはっきりはいってしまった。そのう

え借金とりから無尽の掛金あつめまでわたしの仕事であった。わたしはこういう高利貸的なものが、どんなにむごたらしく貧乏人をしぼりとるものであるかを骨身にてっしておしえられた。わたしは祖母を憎み、祖母から金を借りる人に同情し、こういう金を借りたら末はどうなるかわからないといったり、この仇はいつか必ずおれがとってやるとしんけんになって説いたりしたものだ。

わたしは学校では中学生だったが、家ではこうして下男も同様であった。貧しい自分の家を出て、叔父や祖母のやっかいになっているわたしと、この家の主人である叔父とでは、同じ中学生でも万事につけて待遇がちがった。食事でも着物でも言葉でもみなちがっていた。中学の五年の間、わたしは新しいものを身につけたことがほとんどない。みな叔父のお古をもらってきた。叔父は大がらでわたしは小がらであったから、わたしのきているものはなんでもぶくぶくであった。通学の道でも学校の運動場でも、大ぜいの中学生の中に、手も足もかくれてしまいそうなだぶだぶの洋服をたくしあげたくしあげ、大きな三角頭を小さなからだのうえにのっけてはねまわっているのがいれば、それがわたしであった。わたしの頭のおはちは大きくて三角だったので、中学へ入るとすぐ「三角頭」というあだ名をちょうだいした。この「三角頭」はまたくつなどをはいたことがない。いつも叔父のお古のげたかぞうりで間にあわせていた。それもおいつかなくなるとはだしになった。ただし体操のときだけはそうしないとしかられるので、「体操専用」のくつをはいたものである。これもむろん叔父のお古で底がすっかりぬけており、はだしの足の裏とた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com